

鈴木健二博士の思い出

前田 瑞夫

理化学研究所 前田バイオ工学研究室 主任研究員

私が鈴木博士と初めて会ったのはかれこれ 10 年ほど前、2002 年の春だったと記憶しています。その経緯をお話しするには、まず彼の経歴をご紹介しなければなりません。鈴木さんは、1994 年に名古屋工業大学大学院工学研究科物質工学専攻の修士課程を修了し、ただちに松下電池工業株式会社に入社しました。会社では 2 年間、ニッケル水素蓄電池の開発に携わっていたそうですが、「より基礎的な研究を行いたい」との希望から会社を退職し、大阪大学大学院工学研究科応用物理学専攻の博士後期課程に入学しました。応用物理学専攻という異分野にあえて進学したのは、微細加工技術(フォトリソグラフィ)や微小領域の観察技術(光学顕微鏡、原子間力顕微鏡)などを習得したかったためだったと聞きました。博士後期課程修了後は、大阪大学大学院工学研究科や同産業科学研究所において高名な先生方のもとで博士研究員として経験をつみ、その間に顕微分光、蛍光顕微鏡測定、収束イオンビームを用いたナノ加工などの技術を学びました。またその後、2003 年 4 月より日本学術振興会の特別研究員(PD)に採用され、その後さらに 2 年間、大阪大学産業科学研究所に所属されました。

鈴木さんは、実はこのとき同時に、理化学研究所の基礎科学特別研究員にも超難関を突破して合格されていました。私が鈴木さんと出会ったのも、この際に私の研究室を志望してくれたためでした。すなわちその 1 年前である 2002 年 4 月に、当時設立されたばかりの私の研究室を見学と面談のために訪ねてくれたのでした。しかし鈴木さんは 2 つの研究員選考に同時に合格し、恩師の勧めもあって学振 PD の道を選んだため、この時は理研・基礎科学特別研究員を辞退しています。迫力と魅力にあふれた鈴木さんの辞退をととても残念に思ったことを覚えています。

鈴木さんはその 2 年後、全く異なるテーマで、あらためて基礎科学特別研究員に応募してきて、見事に合格されました。基礎科学特別研究員は、理化学研究所の設備や支援を自由に使える環境と年間 130 万円程度の研究費を与えられた上で、各自の提案した研究テーマを自主的に遂行できる若手研究者育成のための非常に恵まれたポジションです(3 年任期)。それだけに大変厳しい審査を経て約 10 倍の競争率で採択されます。この若手研究者のあこがれのポジションである理化学研究所基礎科学特別研究員に 2 回も合格したことは驚きであり、彼の研究テーマの設定能力や計画能力の高さを明瞭に示しています。

このような経緯を経て鈴木博士が私の研究室で研究を始めたのは 2005 年 4 月のこ

とです。鈴木博士はこのとき「微細 DNA パターンの複写・縮小技術の開発」というテーマで基礎科学特別研究員に採択されました。しかし、鈴木博士の理研での 3 年間の研究活動は決して順風万帆なものではありませんでした。当初提案していた研究テーマの約半分にあたる部分は、着任 2 か月後にして海外の研究グループから誌上発表されてしまいました。また、残った半分の研究テーマも約 1 年後の 6 月に原著論文を完成させたのですが、その投稿中に別の海外の研究グループに誌上発表されてしまいました。しかし、彼はこの逆境にくじけることなく、残り 2 年弱の間に(1)脂質・微粒子複合材料という新しい電気泳動マトリクスを用いた生体膜分子の電気泳動原理や、(2) DNA ナノ構造体を用いてナノ粒子表面に DNA を精密に固定する新規手法、という全く新しいテーマを提案し、理化学研究所内の競争的資金である「研究奨励ファンド」ならびに外部の競争的資金である「文部科学省・科学研究費補助金若手研究(B)」などの研究資金を獲得することで、それら 2 つの研究テーマを独力で遂行しました。その成果はいずれも化学系ジャーナルの最高峰である *Journal of the American Chemical Society*(米国化学会誌)に相次いで発表されています。後者のテーマはその後、科学技術振興機構の「さきがけ研究」にプロジェクト提案する基礎となり、厳しい競争の中、「さきがけ研究者」に選抜され、同機構の専任研究者として研究活動を続けてきました。

この様に鈴木博士の特質は、世界的に見ても例のない独創的な研究テーマを自身のアイデアとして次々に提案し、それを着実に研究成果・実績に結び付けるという類稀な能力にあります。上述のテーマはいずれも、極めて本質的な新しい着想に基づくものでありますが、その一方で実用に結びつくことが確実な基盤技術であることも、彼は常に強く意識していました。また鈴木博士は、毎年行われる理化学研究所の一般公開の際には、理研マークの R 形をしたマイクロ流路を作成して小学生の前で実演するなど、研究以外の仕事にも積極的に取り組んでいました。そんな子供好きのところも含め、とても人間的で魅力的な人物でした。研究室内では若手研究者や学生たちの良き議論相手として、また相談相手として、私を補佐してくれていました。外国のお客さんが講演する際には必ず質問をする好奇心と学術的な守備範囲の広さも彼の素晴らしさでした。

鈴木博士は 2009 年暮れに胃がんの手術を受け、2010 年の春には研究現場に復帰されましたが、その後の転移で再び入院されました。しかし薬石効なく 2011 年 1 月 8 日に 39 歳の若さで逝去されました。今年の秋にご自宅にお見舞いに伺ったときには、やりのこした研究への未練を切々と語っておられました。本当に無念だったろうと思います。世界で注目される研究者として、いよいよこれからというときただただに残念ではありません。ご冥福をお祈りいたします。